

## 重ねて矢代前館長を悼む

大和文華館館長 石澤正男

矢代幸雄先生が去る5月25日に亡くなられてから、早いもので先生の百ヶ日法要が9月1日横浜市神奈川区の成仏寺という菩提寺で極く身内の方々が集まられて行われました。

先生は海外に多くの知友をお持ちでしたから特に御親交のあった方々へは喪主に代り私から御逝去の通知状を郵送しました。それに対して先生の高邁な人格と東西にわたる美術に関する前人未到の偉大な業績を讃え、その人の長逝を心から悼む、真情の溢れた長文の弔慰のお手紙が欧米諸国の友人たちから寄せられてきました。ここに箇々の弔文をお伝える紙面はありませんので、先生の最も親しい友人のお一人である英国のケネス・クラーク卿(Sir Kenneth Clark)がロンドン・タイムズのリテラリー・サプリメントに寄稿された一文をご紹介しますことにします。クラーク卿は1903年オックスフォードに生れオックスフォード大学の他の大学で欧州美術史、特にルネッサンス時代の美術史を専攻して学位をとり、その後この分野では最高峯の碩学で生涯の大半をフロレンスの郊外に私設ながら最も充実した研究資料を備えた大邸宅で過ごされたバーナード・ベレンソン翁(Bernard Berenson 1865—1959)の門下生として研究を積み重ねた方で、矢代先生とは同時の同門の誼みがあるだけではなく、稀に見る秀才として矢代先生はご自分よりは後輩のクラーク氏に人一倍敬愛の念をもっておられまし

た。クラーク氏は31才の若さでロンドンのナショナル・ギャラリーの館長に就任、Sirの称号を与えられ、それからは幾多の顕職につき、また多数の名著の著者として知られております。1968年には英国の文化使節として日本政府に招待され終始矢代先生が案内役を勤められて旧交を温められました。またクラーク卿の作られた「文明」と題する映画はその後テレビとして広く放映され、日本ではNHKが約2年前「芸術と文明」と改題し、13回にわたって放映されましたのでご記憶の方も多いと思います。以下はクラーク卿が8月22日のT L S (前述のロンドン・タイムズ紙の特集欄の略号)に寄せられた追悼文を私が訳したもので、文中にクラーク卿の記憶違いとしか考えられぬ箇所が2、3ありますが、それには註をつけずに訂正しておいたことをお断りしておきます。

(50年10月14日記)

ユキオ・ヤシロを悼む

T L S 編集長殿

若しも貴君が故ユキオ・ヤシロについて私が少し書くことをお許し願えるならば彼の多くのイギリス人の友人たちはどんなにか感謝するだろうと信じます。彼は去る5月84才で長逝しました。古い時代のイタリア美術の学者や愛好家には彼がボティチェリについて著した豪華なる3冊本が一番よく記憶に残っているでしょう。この本は主題にふさわしい例外的な洞察力と脈々として流れる詩情によって書かれたものであります。ま

たこの本は全般的に見て美術作品を出版する方法に影響を与えたものであります。という理由は絵画の各部分写真を多量に使用したのはヤシロが最初の人であったからです。今でこそこのやり方は当り前の形式となりましたが、当時としては誠に驚異に値する新しいやり方でした。

彼はイタリア美術についても一冊の本を書きました。それはレオナルド・ダヴィンチに関する鑑識眼の高い研究であります。日本語で書かれているためこの国では読めた人は少数の人々でした。彼のボティチェリとレオナルドに関する著書は欧州、特にイタリアにおいては長期にわたって居住権を維持するものであります。

彼は日本に帰ってからは美術研究所の所長となりました。この研究所は日本にあるあらゆる東洋美術品の総目録作製とその分類を責任をもって果たそうというものでした。彼は日本美術についても多数の研究発表をしましたが、その一つの「2000 Years of Japanese Art」(日本美術の2千年)は英、独、仏、伊の各語に翻訳されており、日本美術に関する恐らく最善の学問的著作であります。

第二次世界大戦中、彼は古都奈良で多くの日々を送り、奈良にある寺院ではどこでも快く迎えられました。欧州各国の美術館を歴訪して来た彼の経験から見ると日本最大の公共的コレクションがどれも無味乾燥で無秩序の展示法を行っているとはしか見えなかったよう



ケネス・クラーク卿(左)と故矢代前館長

です。そこで彼は有志の友人たちを説得して、古都奈良の都心から2、3マイルのところ到大和文華館という理想的な美術館を建設するのに出資するようにしてもらいました。この美術館は美術作品が、ワシントンのフリーア美術館におけるように、見て楽しめるという点では、日本にある僅か2つの美術館の一つであります。

ユキ(矢代先生の愛称)は非常に聡明で偉大な学者であったばかりでなく、人としては最も親しみやすい人柄でした。それで海外から日本を訪れる数えきれぬ多くの人々が彼の指導によって裨益されたのであります。彼は公務の時間まで割愛して来訪者を、彼の案内がなければ到底近づきえない有名寺院に連れて行ってくれました。私は彼との45年以上に及ぶ交友の喜をもつ者ですが、彼と一緒にいる時はいつも愉快でした。一番楽しかったのは私が日本政府に賓客として迎えられ、彼と共に過ごした数ヶ月間の思い出であります。

若しも東と西との相互理解がいつの日にか可能になるとしたら、それはユキオ・ヤシロのような人物によってのみ始めて成就されることであらうでしょう。

ケネス・クラーク

季刊 美のたより No.34

昭和50年11月10日

発行 大和文華館